

**精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの
実施・普及の特徴と、その発展のあり方に関する探索的研究**

【論文要約】

主指導教員：大島巖 教授

副指導教員：藤岡孝志 教授

日本社会事業大学大学院

社会福祉学研究科博士後期課程 3 年

22120008 鎗田 英樹

序論 研究の背景と目的

背景:これまで独自の発展を遂げてきた全国身体障害者スポーツ大会と全国知的障害者スポーツ大会（ゆうあいピック）は 2001 年に統合され、第 1 回全国障害者スポーツ大会が開催された。しかし、精神障害領域においては過去にスポーツにおける全国規模の大会実績がなかったことなどから、他の 2 障害と同時に参入することが出来なかった。これまで精神障害のある人を対象としたスポーツは、病院内におけるレクリエーションやリハビリテーションを主としたものが多く、競技としてのスポーツと言った視点が育ってこなかったことが要因の一つである。

精神障害のある人を対象としたスポーツ競技については、2008 年の全国障害者スポーツ大会（大分大会）において、初めてバレーボール競技が正式種目化された。しかし、現段階において精神障害のある人を対象とした団体種目はバレーの 1 種目のみである。単純に障害者の総数だけで判断することは出来ないが、それであっても精神障害者総数 320 万人に対して団体競技 1 種目では十分といえない。

2011 年に施行されたスポーツ基本法においても、「スポーツは障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行なうことができるよう、障害の種類及び程度に応じて必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」と明記されており、精神障害のある人にとっての競技性スポーツの実施機会を確保することや、その実施・普及を行うこと、競技種目の拡大を図ることは、精神障害のある人のスポーツにおける「完全参加と平等」に貢献し、その権利を保障するといった点で、ノーマライゼーションの観点からも重要なことと言える

また、他障害のスポーツ実践などから、健常者と一緒にスポーツを楽しみながらコミュニケーションを取ることが、障害理解の契機として有効であることや、健常と障害を隔てない「ユニバーサル・スポーツ」の普及などが社会的統合の推進につながると期待が寄せられている。

目的:本研究の目的は、以下の 2 点である。

まず、身体障害など他の障害と際だった特徴をもつ精神障害領域の競技性スポーツの実施・普及のあり方について、取り組みが進む競技性スポーツチームに対する質的・量的調査から、当事者選手と支援者の相方が目指す実施・普及の方向性を明らかにし、それを踏まえて有効な実施・普及モデルを探索的に構築することである。

また、精神障害の領域での競技性スポーツの効果的な実施・普及の取り組みが、当事者選手や社会にどのように影響するのか、またその特徴は他の障害の取り組みとの比較から、どのように位置付けられ、どのように共通し、どのように異なるのか、その発展のあり方を探索的に明らかにすることである。

これらの分析を通して、精神障害特有の競技性スポーツの実施・普及と発展のあり方について示唆を得ると共に、社会からの理解を得るのに大きな困難を有する精神障害のある人たちに対して、スポーツを介した社会的統合という新しいアプローチの発展可能性を検討することにしたい。

第1章 精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの現状と課題に関する 先行研究レビュー：先行文献に基づく実施・普及モデルの構築

目的：本調査の目的は、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの文献調査を行い、その関心の高まりの経緯や現状の課題、他障害との違いなどを明らかにすることである。

また、その上で競技性スポーツの実施・普及の発展が当事者や社会に対してどのような影響を与えるか、仮説としての理論的枠組み構築を行うことである。また併せて他障害の領域における競技性スポーツの実施・普及に関する調査を行うことで、精神障害の領域における実施・普及方法への示唆を得ることである。

方法：本研究では、精神障害のある人が勝利を目指す目標を持った競技性スポーツと出会い、その取り組みの中で同じ障害を持つ仲間たちと「勝利」という目的を共有し、各自の役割を全うする中で達成感を得ていくものとする。また、この競技としてのスポーツへの取り組みが当事者満足度を高めるだけでなく、その発展に伴って社会的統合やアンチ・スティグマの効果を示すことを概念的な枠組みとして、探索的な先行文献検索（ハンドサーチ）と、文献データベースを用いた系統的文献検索を併用して文献検索を行った。

キーワードは「身体障害」および「知的障害」、「精神障害」および「スポーツ」を用い、国内文献検索には CiNii、医学中央雑誌、英文文献には PubMed を用いた。また、概念的枠組みに従い、「社会的統合」または「社会的包摂」、「スポーツ」、「スティグマ」、「スポーツへの社会化」等のキーワードでも検索を行った。

該当した文献については理論的枠組みに沿い、キー概念となる①障害者スポーツ（精神障害者スポーツを中核に置く）、②社会的統合、③スティグマ、④スポーツ、⑤スポーツへの社会化、⑥実施・普及に分類し、分析した。

結果：探索的文献検索、および文献データベースを用いた系統的文献検索の結果、日本語論文は探索的先行文献検索にて検索した 47 文献および系統的文献検索において検索し、検討文献加入条件に合致すると判断した 18 文献を併せて 65 文献を本研究において検討・分析した。また英文論文は、探索的先行文献検索において検索した 2 文献と、系統的文献検索にて該当した 48 文献から検索条件に合致すると判断した 7 本の計 9 本をレビューした。

英文論文は多数検索されるが、脳震頭や外傷など他の障害に関するもの、治療的效果に関する論文が多く、検討論文除外基準によって取り除くと 3 文献となった。

考察：先行研究結果より、実施・普及に関する暫定版理論モデルを構築した。

精神障害のある人たちは「重要な他者」と出会い、スポーツを始める。初めはレクリエーションでも、「競争」という視点が加わり競技性スポーツに取り組むようになる。また同じ障害を持つ仲間と「勝利」という目的を共有し、「促進者としての対戦相手」と切磋琢磨する中で「スポーツへの社会化」を進め、エンパワメントされていく。また大会参加自体が、ノーマライゼーションの一過程であり、社会参加の機会となる。またスポーツを通して健常者と障害者が交流することが社会的統合を促進する上で重要であり、当事者が自ら発信しつつ一般住民と接触体験を図ることがアンチ・スティグマに繋がっていく。実施・普及が進むと競技レベルも上がり、当事者選手の達成感や自尊感情も大きくなる。またよりレベルの高いパフォーマンスを示すことが、より高いアンチ・スティグマの効果を示すと考えられる。

第2章 精神障害トップ選手に対する全国聞き取り調査の内容分析

～質的研究に基づく実施・普及モデルの構築①～当事者トップ選手は競技性スポーツに何を望んでいるのか

目的：本研究の目的は、競技としてスポーツに取り組んでいる精神障害当事者選手に対して、競技に取り組むことの意義や目的などについて聞き取り調査を実施し、その結果から当事者選手が望む競技性スポーツの在り方を明らかにし、それと合致した実施・普及モデルを構築することである。また精神障害のある人にとって、競技性スポーツがどのように当事者の社会的統合に影響を及ぼしているのか明らかにすることである。

方法：競技性スポーツ大会に、選手として出場している精神障害当事者選手（ $n=25/m=22$, $W=3$, $age=30\pm5.6$ ）を対象にインタビューガイドを用いた半構造化面接による聞き取り調査を実施した（平均聴取時間 27 分）。25 名中 6 名はフットサルの国際選抜、9 名が全国選抜として大会に参加するなど一定の実績を持つことから、競技性スポーツの対象者として代表性があると判断致した。また分析については内容分析（Krippendorff, 1980）を実施した。聞き取り内容は IC レコーダーにて録音し、後日逐語録を作成した。作成した逐語録はコード化し、カテゴリー化した。また、導き出された精神障害のある当事者トップ選手の語りの内容をもとに、プログラム評価理論を援用し、その発展していく過程を【導入期】【本実施期】【発展期】の 3 期に分け、ライフサイクル論的な視点および実施・普及の視点で考察し、モデル構築を行った。

結果：7 つのメインカテゴリーおよび 38 のサブカテゴリーを抽出した。本文中ではカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを< >として示す。

【チーム加入の経緯】では、選手は通所した施設で< スタッフからの声かけ >によってチームに加入していた。< 競技志向・向上心 >を【競技としてスポーツに取り組む意義・目的】とする一方、< リハビリテーション >や< 仲間との交流 >を求める意見も伺われた。【病状への影響】では< 症状の安定 >が聞かれる一方、回答者の約半数は< 影響なし >や< 不安や疲労 >と回答しており、必ずしも病状への好影響を感じていない。一方で< 前向きになれた >< 自信がついた >などの【気持ちの変化】がみられ、【大会に望むこと】では< 社会的統合 >が示された。また< 仲間に対する思い >を持つ選手も多くスポーツを介したピアサポート機能が示唆された。

考察：精神障害のある人のスポーツが発展して行く過程を【導入期】【本実施期】【発展期】の 3 期に分け、解釈を行った。【導入期】、多くの選手は支援者を「重要な他者」とし、レクリエーションやリハビリテーションとしてスポーツを開始するが、「医学的リハビリテーション」より「社会的リハビリテーション」の役割が大きい。【本実施期】では「競争」の視点が加わり当事者の主体性も高まるが、「勝利」だけが目的とはならず、その発展は競技性を中心とした目的の重層化に向かう。【発展期】、選手たちは同じ障害を持つ「仲間」と競技性スポーツに取り組む中で< 心理的ストレス >や< 偏見に対する不安 >を抱えつつも「勝利」や「自己成長」を実感することでエンパワメントされ、自信をつけ社会復帰の方向性をもった、それぞれのリカバリーゴールへと向かって行く。また実施・普及が進むことで競技性も高まり、エンパワメントされた当事者選手が一般住民と接触体験を図ることがアンチ・スティグマに繋がっていく。実施・普及はスポーツを介した社会的統合の原動力であり、その質を高める重要な要因である。

第3章 競技性スポーツに実績のある支援者に対する全国聞き取り調査の内容分析 ～質的研究に基づく実施・普及モデルの構築：支援者は何を目的に競技性 スポーツの推進を行っているのか

目的：精神障害のある人を対象とした競技性スポーツ大会の開催や、実施・普及に取り組んできた実績のある支援者から実施・普及の目的・意義や効果的だった取り組み、今後の課題や展望などを聴取することで、支援者にとって精神障害を持つ人の競技性スポーツを支援する目的・意義や課題、効果的な取り組みを明らかにすることである。

方法：これまで先進的な実施・普及に取り組んできた団体代表者(n=9/m=8,w=1,age=45.7±10)を対象に半構造化面接を実施(平均聴取時間 47 分)した。9 団体のうち 2 団体は全国を対象とした競技統括団体であり、6 つは県もしくはブロックにて大会開催等を行っている団体であるなど、それぞれの実績から GP 事例として適任と判断致した。また分析については内容分析(Krippendorff,1980)を実施した。聞き取り内容は IC レコーダーにて録音し、後日逐語録を作成した。作成した逐語録はコード化し、カテゴリー化した。また、導き出された支援者の語りは、前章にて精神障害のある当事者トップ選手の語りの内容からプログラム評価理論を援用し導きだした【導入期】【本実施期】【発展期】といった 3 期のモデルに追記・修正して行く形でモデル化を行った。

結果：結果、8 つのカテゴリーと 26 のサブカテゴリーが抽出された。本文中ではカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >とし示す。

支援者の多くは【自身のスポーツ体験の影響】から活動に参加しており、<効果の実感>や<イメージを覆された経験>をしていた。支援者も社会的統合を意識しており、当事者がスポーツを通し健康な面を示すことがアンチ・スティグマに繋がることを期待していた。実施・普及の取り組みとしては、<大会運営>や<教室の開催>が効果的とされ、大会開催の実行委員会には医療・福祉関係者だけでなく当事者や一般市民も加わっていた。また<プロ・スポーツチームからの協力>も、モチベーションや自尊心を高める上で重要である。組織の在り方は精神保健福祉関係者だけでなく、スポーツ関係者が入ることが望まれており、チームの在り方も<地域型クラブチームへの移行>が期待されていた。【実施普及の課題】では金銭面が大きく、そのことが大会参加の支障となっていた。

考察：前章で示した 3 期の仮説を用い、実施・普及の示唆をモデルに加え、説明を加えていく。

【導入期】、支援者は自身のスポーツ経験からスポーツを介しての社会的統合やアンチ・スティグマを目的に活動を始めており、<効果の実感>や<イメージを覆された経験>が支援者を競技性スポーツへと向かわせていた。【本実施期】は競技性が高まり、その牽引力としてプロ・スポーツチームの協力が効果的になる。一方、経済的課題から参加が阻害されないよう、配慮が必要となる。【発展期】、当事者選手が<心理的ストレス>や<偏見に対する不安>を抱えつつも、活動を通してエンパワメントされていく姿をみて、支援者は競技性スポーツの実施・普及を<意味のあることの実践>と感じており、スポーツを通し健康な面を示すことがアンチ・スティグマに繋がることを期待していた。また社会的統合を意識した分け隔てのない交流大会の開催や、一般大会への参加の奨励などが効果的となるが、その実施・普及が技性スポーツを介しての社会的統合の質を高める原動力といえる。

第4章 競技性重視のスポーツ大会に参加するチームを対象とした全国質問紙調査の 分析～暫定版実施・普及モデルの妥当性検証を中心に～

目的: 全国で活動している、精神障碍のある人を対象としたチームに対して質問紙調査を行い、それらの結果に対して探索的な検討を行うことで、量的な知見から競技性スポーツの実施が精神障碍のある人や社会に対して与える影響や、実施・普及に必要な要因などについて言及し、前章までで構築した実施・普及モデルについて理論的な補足・補強を行うことである。また、その結果からスポーツを介した社会的統合を実現させるためには、各段階においてどのような支援が必要となるのか、示唆を得ることである。

方法: 競技性を重視した精神障碍当事者チームに対して郵送による質問紙調査を行った（郵送数 368 通:回答数 172 通／有効回答率 46.7%）。なお質問紙の回答者はチームの代表者とした。対象となるチームの選出は、平成 27 年度の競技性スポーツ大会に出場実績のあるチームとした。主に 12 項目からなるチームの志向度(5 件法, 1 項目 5 問)を軸として統計解析ソフト「SPSS Statistics25 for Windows」、「SPSS Amos25Graphics」を使用し統計解析およびパス図作成を実施。前章にて作成した暫定版実施・普及モデルとの類似性を確認することで、モデルとしての妥当性を検討した。なお、本調査は、日本社会事業大学社会事業研究所研究倫理審の承認を得て実施した（平成 29 年 2 月 27 日承認：受付番号 16-1001）。

結果: チーム全体の 73%は施設型チーム($n=127$)、20%が地域クラブ型チーム($n=38$)であった。また対象者の 66%は精神病圏、17%は発達障害圏であった。

12 項目の志向度に対しては、因子分を実施（主因子法・バリマックス回転法）。3 因子指定で分析を行い、第 1 因子を「社会的統合としてのスポーツ」、第 2 因子を「リハビリテーションとしてのスポーツ」、第 3 を「レクリエーションとしてのスポーツ」とした。また重回帰分析からは「拡充要素」、「経済的負担度」、「主体性」、「限定志向度（マイナス）」、「実施普及不満度」が「社会的統合」に大きな影響を与えていることが示されたため、上記 5 つの志向度と競技性スポーツが、どのような因果関係を経て社会的統合へと至るのか関係性を明らかにするためパス解析を実施。パス図の作成は探索的にを行い、最も適合度が高いモデルを採用した ($GFI=0.954$, $AGFI=0.874$, $RMSEA=0.095$)。その上で前章にて作成した暫定版実施・普及モデルとの類似性を確認した結果、一定の類似性が確認できた。競技性から直接社会的統合へは繋がらず、当事者の主体性 (0.25) やチームの在り方が競技志向度を高め、セルフヘルプ (0.15) や主体性 (0.16) を高め、循環しながら社会的統合に至ることが示唆された。

考察: 暫定版実施・普及モデルに対して、妥当性と共に社会的統合を推進する指針を得ることが出来た。導入期、多くの当事者は「レクリエーション」と「リハビリテーション」と切り離すことは出来ず、両者の区別はあまり明確でない。また本実施期は「競技志向」を高めることが「セルフヘルプ」機能を高め、結果として「主体性」や「社会的統合」を推進するため、実施普及を図る上でも「レクリエーション」から「競技性」への転換は重要となる。また当事者選手の主体性を高め、参加を施設の意向で制限しないことが重要である。発展期では「競技性」だけ高めても社会的統合に繋がらない。より幅広い「セルフヘルプ」活動へ繋がっていくことが社会的統合に向かって行くことを念頭におき、ピアサポート機能を重視しつつ、競技性スポーツを介して当事者選手がエンパワメントされるよう配慮することが必要である。

第5章 総合考察と結論

本研究において、精神障害のある方を対象とした競技性スポーツが、当事者の社会的統合にどのような影響を与えているのかについて質的・量的調査の結果から明らかにし、効果的な実施・普及モデルを構築した。精神障害のある人の多くは、自身が通う医療機関や福祉施設で「重要な他者」として精神保健福祉関係者や同じ障害を持つ仲間に出会い、スポーツを開始する。初めはレクリエーションとしてだが、次第に競技性スポーツへと移行して行く。そして「社会参加」の一つとして大会に出場し、「勝利」を目指して仲間と協力し、チームとしても凝集していく。そこには「偏見への不安」や「病状への不安」も内包しているが、仲間と活動を通して成長して行き、スポーツを通して健康的な姿を発信することで「アンチ・スティグマ」の効果を示す。そして、「勝利」や「成長の実感」を通してエンパワメントされることで受け身の姿勢から主体的姿勢へと変容し、その姿をみた支援者自身もエンパワメントされていく。その取り組みは施設内活動から地域活動に移行して行き、当事者主体のスポーツを介したピアサポート的な活動となっていく。そして、より競技性の高い大会などに挑戦するようになるが、一方で障害のあるなしに関係のない取り組みも並行して行われ、社会的統合の動きが生じてくる。そのため、そのゴールは必ずしも「より高い競技性」へとは向かわず、競技としてのスポーツを通して自信をつけ、障害のあるなしに関係のない社会的統合の方向を目指すところが、精神障害のある人の競技性スポーツのモデルの特徴である。また、競技大会参加だけでは社会的統合にはつながらず、当事者選手の主体的な取り組みと健常者との交流が必要となる。

また、競技性を高めるためには実施・普及が必ず必要であり、競技人口が少ないとピアサポートの効果も十分には発揮されず、当事者選手をエンパワメントする土壌も整わない。自信を深めて主体的に行動する当事者選手と健常者が交流することが、アンチ・スティグマの効果を生み、社会的統合を深めていく、よい循環を生じる。そして実施・普及がその土壌を作り、社会的統合を後押しするものと言えるだろう。

以上のことより、精神障害のある人にとっての競技性スポーツは、その活動を通して当事者やその仲間、支援者をエンパワメントする力を持った重要な活動であると言える。また、その活動が当事者の主体性を高め、アンチ・スティグマや社会的統合を後押しする可能性を持っており、社会からの理解を得るのに大きな困難を有する精神障害のある人たちに対して、スポーツを介した社会的統合という新しいアプローチを提案することが出来たと考える。そして、そこには実施・普及が併せて必要とされ、実施・普及の質がそのまま当事者の主体性や自信、社会的統合の質に影響する特徴を持っている。

本研究は精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及に注目し、その実施・普及の在り方についてモデル開発を行ったが、併せてその目的の一つとして社会的統合の可能性を示した、独自の研究である。また日本国内および世界においても、質的・量的において広域な調査を行った、初の研究と言える。このモデルを活用することで社会からの理解を得るのに大きな困難を有する精神障害のある人たちに対して、スポーツを介した社会的統合という新しいアプローチを提案することが出来るだろう。またモデルを介して実施・普及を進めることで、精神障害のある人たちがスポーツを楽しむ機会を増やすことが出来、生きがい楽しみ、心身の健康など、幅広い Well-Being に大きく貢献するものである。